

六^あ連^{れん}銭^{せん}

平成13年3月31日発行

〒381-1231 長野市松代町松代4-1(真田宝物館)



西洋馬具ゼッケ (象山所用)

佐久間象山が遭難のときに使用。

象山の血痕が付いている。(近山資料93番)

資料紹介 所蔵の佐久間象山関係資料について 近山與士郎氏旧蔵資料

松代藩文化施設管理事務所の所管施設として象山記念館があります。まず、象山記念館建設の経過から述べておきましょう。

象山記念館は昭和39年（1964）、地元有志によって象山先生一〇〇年祭奉賛会が設立され、翌年9月に展示施設の完成を見ました。しばらくは奉賛会が本館の管理運営を行っていましたが、昭和42年3月、同奉賛会から長野市に記念館が譲渡され、4月に市の施設として開館、昭和63年10月には新たな展示室が増築されました。

平成9年には、同館2階に松代通信資料館が併設されました。松代通信資料館は象山が通信実験を松代で行ったという故事にちなんで、平成3年に旧松代藩鐘楼近くのN.T.T.の展示施設を賃借し開館したものです。しかし、平成7年にこの松代通信資料館の閉館を決定。象山記念館に併設されることとなったのです。

このような経緯をたどった象山記念館ではありますが、実状は単独館とは言いがたく、真田宝物館の収蔵品のなから展示がなされているので、真田宝物館の

分館、いや「支館」といっても過言ではありません。象山記念館には収蔵庫がないためというハード面の問題もありますが、真田宝物館自体に佐久間象山に関する収蔵資料が少ないということも指摘されるのです。

しかし、真田宝物館には、象山関係資料のうちでも特筆すべきものが収集されています。近山與士郎氏旧蔵資料です。この資料群は、長野市教育委員会が長野市県町の近山與士郎氏から購入したもので、総点数は九十五点。蘭書や和本などが主です。

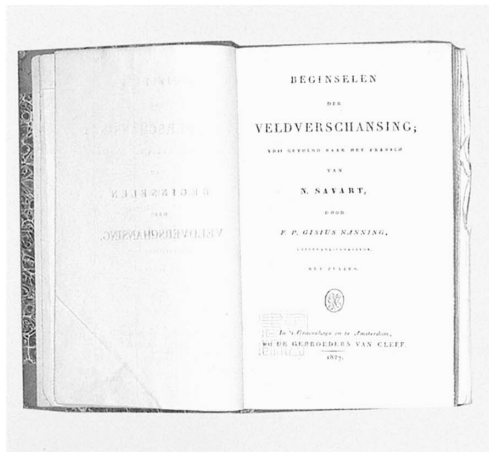
この資料群について、当時・東大史料編纂所におられた山本武夫氏は次のような所見を示されています。

この資料群は、佐久間象山の嗣子・恪（恪二郎とも）の末亡人・静江のもとに伝来したもので、その後、明治22・23年頃に松本市の窪田畔夫から近山家が入手したものとされる。このため、佐久間家

伝来の資料群といえるのである。明治年間に著された日下寛『犀北館記』に于此でこのことが記されている。この資料群で注目すべきは、何といっても蘭書の一点一点が稀覯本であるということである。それにもまして、これらの蘭書は佐久間象山が所持していたということがきわめて重要である。文書類については、すでに『象山全集』などに収録されているものもあるが、未収分もいくらかある。文書類のうち特に著名なものとして、象山暗殺の際に京都・三条小橋の高札場に貼りつけられていたという「斬奸状」があ

る。これについては、その真偽は今後詳細な検討を必要とする資料である。漢籍、および和本については、珍本というべきものはないが、佐久間象山が伝世したという点で重要である。

このような所見を得ているのですが、ただ、佐久間家伝来の資料（近山與士郎氏旧蔵資料）が真田宝物館に収蔵されていることはあまり知られていないようにおもわれます。象山記念館への展示のみが主目的とされ、この重要性が見過ごされてきたのです。長野市民共有の財産としていきたいものです。



サハル著 工兵初問



象山・恪二郎・順子の写真

近山與士郎氏旧蔵資料仮目録(真田宝物館蔵)

小林計一郎氏・昭和57年調査の目録

番号	資料名	年代	数量	内 容
1	象山・恪二郎・順子の写真		4枚	象山2枚・恪二郎1枚・順子1枚
2	真田幸貫筆・大黒天画像		1幅	
3	マリン編・蘭仏新辞典 (アムステルダム刊)	1701年	1冊	幸貫が金600両で買い与えたものという
4	Wヘンリー著・イベイ訳 化学	1810年	9冊	全8巻・索引別巻
5	ヘーメル結婚に関する男女の生理解説	1758年	1冊	アムステルダム刊・フランス語より訳・銅版図入
6	ヤステレイン物理化学一般愛好者及び商工業の進歩と化学・産業・交通等の便益の為の物理化学の実験書	1797年	3冊	2・3巻に蔵書印あり
7	ワーテルロー戦記	1815年	1冊	ヘーグ刊 フランス語より訳 本邦最古のナポレオン文献
8	オランダ官軍砲兵演習備要	1818年	1冊	ヘーグ刊 「象山書院」の印あり
9	サハル 工兵初問	1827年	1冊	ヘーグ・アムステルダム刊 「象山書院」の印あり
10	プロイセンのヤコブ原著 スティルテス訳 ヨーロッパにおける野戦隊の現状	1846年	1冊	アムステルダム刊
11	要塞初問 10 ニング訳	1828年	1冊	ヘーグ・アムステルダム刊 「象山書院」の印あり
12	ヘッケル歩騎砲三兵答古知幾 ブコップ訳 (ドイツ語より)	1833年	2冊	「象山書院」の印あり 朱点付箋多く熟読の跡歴然
13	文芸協会雑誌	1831年・1832年	4冊	1831年5月・10月号 1832年2月・6月号
14	雑誌「国民運動」	1831年・1832年	4冊	1831年7月号 1832年3月・4月・12月号
15	雑誌 評論	1831年・1832年	3冊	アムステルダム 31年5・9号 32年1号
16	ホースヘル砲兵学・理論と実際下士官用	1836年	1冊	
17	バタバア刊・英訳より 大砲操縦法	1836年	1冊	
18	オランダ野砲隊の過去と現在	1848年	1冊	アムステルダム刊・「象山書院」「長崎東衛官許」の印あり
19	ドメレン オランダ軍陣医学史	1857年	1冊	「長崎東衛官許」の印あり
20	顕微鏡用法			表紙、1頁から32頁欠
21	ラスパイル 万病素人早期療法	1857年	1冊	「象山書院」「長崎東衛官許」の印あり
22	共益商社編 オランダ文典	1810年	1冊	筆写本
23	フーヘランド医学総論 病気の起源と発生・病理学講義	1799年	4冊	アムステルダム刊の写本 堀内素堂の「幼々精義」の原本はこの版
24	学芸雑誌 美術と趣味	1831年	3冊	
25	蘭書写本	1835年	1冊	大型・本文15枚
26	春秋辞命準繩		2冊	自筆本・「春秋」より外交関係を抜き出す。
27	古琴弁		1冊	漢文写本
28	春渚紀聞 巻8		1冊	写本
29	象山幼時の写本		1冊	
30	魯英国使渡来記	安政5年	1冊	依田利継書 象山付記
31	蛮国旗印		1冊	写本・万国旗
32	呂床国漂流記	弘化2年	1冊	写本
33	丙午前重譯誌		1冊	写本
34	函館港のさかえ		1冊	写本
35	軍容の事		1冊	本文3枚 象山自筆
36	佐久間修理及男恪二郎大略		1冊	佐久間象山評
37	儉約に付御書下ヶ等		7冊	雑書等写本
38	塚田大峰著塚注六記	天明7年	4冊	巻1・5欠
39	古言梯	明和2年	1冊	「象山書院」の印あり
40	莊子 南華真經	元文4年	5冊	全10巻のうち
41	周礼	寛延2年	8冊	全42巻のうち
42	悟真篇四註		1冊	帙入 表題象山自筆
43	神相全編		10冊	帙入 帙題・表題象山自筆
44	唐六如集		6冊	帙入
45	欽定儀礼義疏		23冊	帙入
46	欽定儀礼義疏		25冊	帙入
47	欽定周官義疏		23冊	帙入
48	欽定周官義疏		25冊	帙入
49	御製日講四書解義		20冊	帙入
50	字彙		14冊	
51	欽定礼記義疏		82冊	
52	象山先生寄畏堂七弦琴之翰	嘉永5年	1翰	
53	象山先生臨書座鶴銘并序 一帳	天保8年	1帳	箱入
54	佐久間象山翁顔法臨書		1帳	
55	顔魯公三表帳石刷		1帳	
56	顔魯公争座帳石刷		1帳	象山自筆の跋文あり
57	唐墨		1個	箱銘「蔵煙」
58	象山天文学	天保11年	1巻	象山の序
59	呈 豊山長野君 足下書	天保4年	1巻	
60	佐久間象山書簡	天保11年・14年	1巻	6通
61	佐久間象山書簡		6通	6通
62	佐久間象山書簡		1巻	
63	佐久間象山翁和歌短冊		1巻	
64	白井元吉医案	戊午6月	6枚	治療記・象山筆
65	小曾根乾堂刻印譜		1巻	
66	象山銅印・児玉果亭書簡	明治42年	1巻	象山の銅印を近山氏に譲り渡したことを記す
67	横浜開港寄港図		1軸	象山自筆という
68	ベルリ来航饗応図・銃の図		1軸	
69	佐久間象山印額		5個	
70	疎林外史寄 象山先生之画		1軸	
71	男恪二郎書 長歌		1軸	
72	佐久間神溪 詩文		1巻	
73	佐久間神溪 詩文		2巻	
74	順子夫人和歌		1軸	
75	佐久間家伝の文書		1冊	
76	書簡の貼り込み		1冊	高井鴻山ほか10通・象山宛
77	書簡の貼り込み		1冊	山階家外から象山宛・10通
78	国分番長書簡		1冊	
79	佐久間家伝来の雑録		1冊	22通
80	象山遭難につき藩への届書等	元治元年	12枚	
81	象山改革予言書など		5枚	罪文など
82	高野車之輔書簡	元治元年	1通	象山の最期を伝える・依田又兵衛ほか宛
83	渡辺才太郎書簡		1通	恪二郎宛・仇討ちを勧める
84	佐久間先生深手疵改留		1枚	
85	題陶朱公像		1点	
86	亡父・恪一周忌法事配り物・香典帳	明治11年	1冊	
87	亡父(象山)一七回法事執行控	明治13年	1冊	静枝
88	亡父佐久間恪一七回忌法事控	明治16年	1冊	佐久間静枝
89	清光院仁啓守心居士二三回法事控	明治19年	1冊	佐久間静枝
90	贈正四位縁故贈答簿	明治21年	1冊	佐久間静枝
91	斬奸状	元治元年	1枚	三条小橋の高礼場に掲げられたという
92	白羅紗割羽織		1着	ベルリ来航に際して使用したという
93	西洋馬具ゼッケ		1枚	遭難の際に使用した。血痕有り
94	象山自製七弦琴		1面	千曲川の船の廃材を利用したという
95	地震予知器マグネット		1個	磁石

平成十二年度企画展示

真田三代

平成十二年度の企画展示として、「真田三代」という展示をおこないました。「真田三代」とは、真田幸綱（幸隆とも）、真田昌幸、真田信之、それに幸村を加えた三代のこととしました。真田家はじめて歴史上姿を現わす頃から、大坂の陣にいたるまでの過程を時間軸にそって展示しました。

平成十二年は、関ヶ原の戦いから四百年目ということで、おもに関ヶ原の戦いに関係した資料を収集しました。あわせて、真田家といえは真田幸村の名が挙げられるように、この幸村と大坂の陣に関しても取り上げました。主に、大阪や和歌山から資料を拝借しました。

展示の主眼として、関ヶ原の戦いについては、主に真田家伝来の古文書のなかから、関ヶ原の戦いについてのものを中心に据えました。真田家伝来の古文書の特徴のひとつとして、関ヶ原の戦いに関する古文書の多さが指摘できます。

大坂の陣に関しては、できるだけ伝承されたものを展示しようと考えました。真田幸村については、江戸時代になって多くの伝承が付与されていますので、こ

れをあえて史実に即して展示してもほとんどストーリーが成立しません。このため、真田幸村が使ったなどと伝承されているものについて、極力集めました。また、真田幸村（信繁）の書簡については、現在確認されているものそのほとんどを展示しました。

この展示にあわせて、講演会を行いました。「関ヶ原の戦いと真田一族」という題で笠谷和比古氏（国際日本文化研究センター教授）にお話し頂きました。関ヶ原の戦いに真田家は直接参陣はしていないものの、徳川秀忠軍が関ヶ原の戦いに遅参した原因を、上田城における真田昌幸・幸村対徳川秀忠軍にあることに着目してお話ししました。

また、大坂の陣については、「大阪府下の真田幸村伝承遺跡について」という題で、北川央氏（大阪城天守閣主任学芸員）にお話し頂きました。真田幸村と大坂の陣との関係については、大阪府下に多くの伝承地がありますが、これらがどのように成立してきたのかを、江戸時代の地誌類などによって、その成立の経緯などについて触れて頂きました。

なお、この展示にあわせて、「真田三代」という図録を刊行しました。お二人の先生にもご寄稿頂きました。また、北原系子氏「大坂夏の陣のかから版の新しい読み方」という論文も掲載されています。（文責 原田和彦）



▲笠谷和比古氏の講演



▲北川央氏の講演